

2 家庭教育、体験活動、社会参加の現状

(1) 家庭教育の現状

福岡県では、昭和55年より県立社会教育総合センターにおいて、幼児、小学生、中学生を持つ親等の養育態度・意識について継続的に調査研究を実施しています。その中では、子育てに自信のない親の増加など家庭の教育力の低下をうかがわせる結果が表れています。

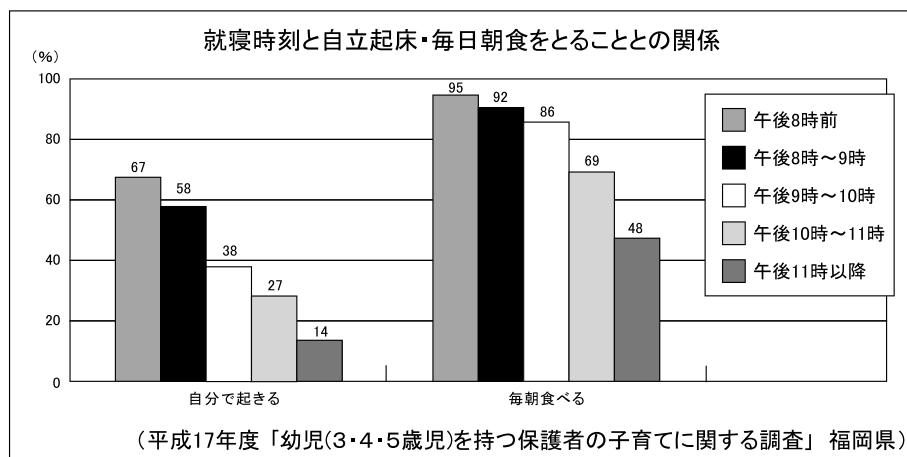
さらに、平成18年12月に福岡県PTA連合会が実施した小中学生の生活実態調査では、就寝時間や自立起床、朝食、テレビの視聴時間など子どもの生活習慣に関する課題が明らかになっています。

これら親等の養育態度や子どもの生活実態については、文部科学省や県の関係部局、民間企業等の調査からも同様の結果を見ることができます。

① 幼児期から「就寝時刻が遅く、朝起きられず、朝食が食べられない」という悪循環が生じている。

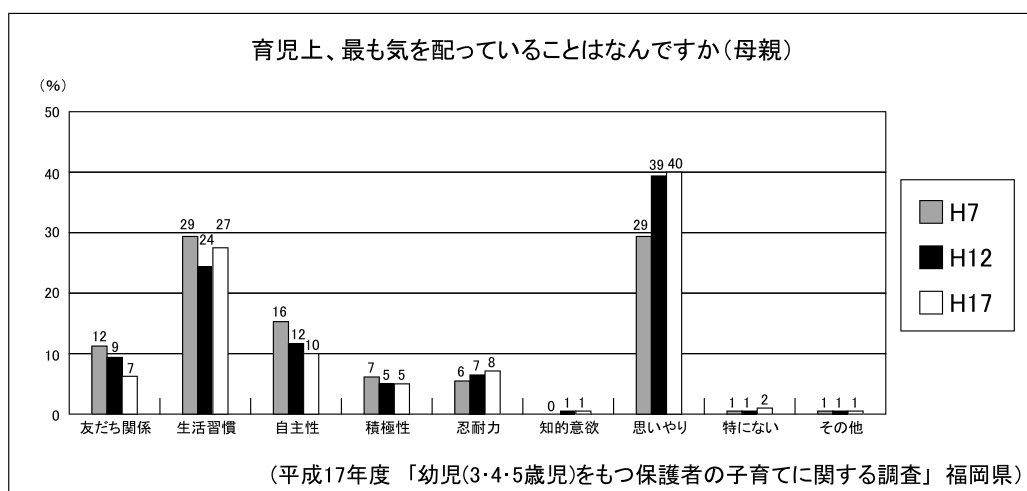
平成17年度の福岡県の調査では、幼児（3・4・5歳児）の就寝時刻は「9時から10時の間」の割合が一番高くなっており、9時前に寝る幼児は3割足らずに過ぎません。「10時以降」と答える親も2割以上います。

また、「就寝時刻と自立起床・毎日朝食をとることとの関係」については相関関係があり、「遅くまで起きている子どもは朝起きられず、朝ご飯が食べられない」という悪循環になっていることが分かります。



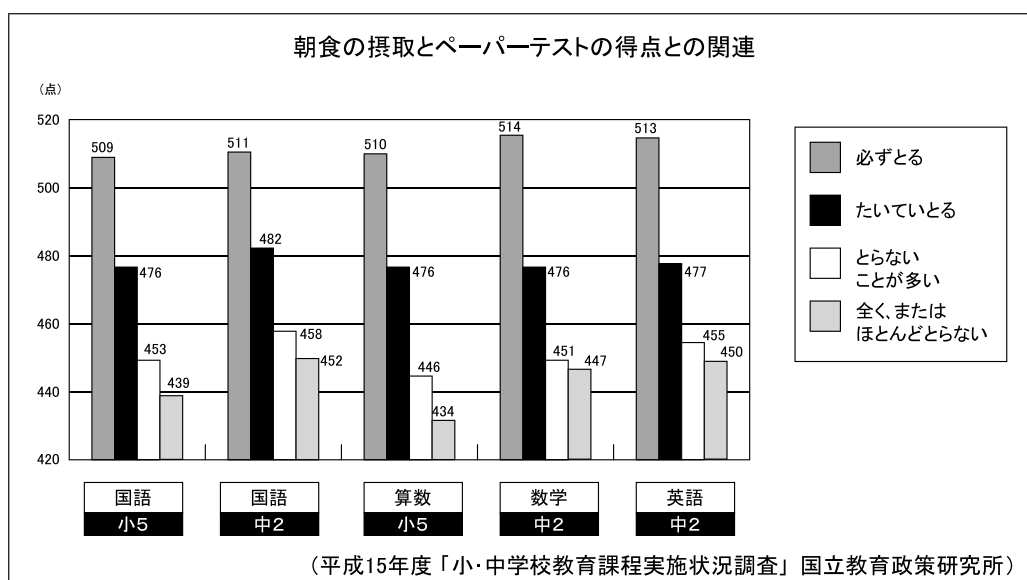
② 幼児期において、親が最も気を配っていることは、「基本的生活習慣」から「思いやり」に変わってきている。

①と同じ調査で、「育児上、今最も気を配っていること」は、父親・母親とも平成7年は「基本的生活習慣」ですが、平成17年は「思いやり」となっています。これは、親自身が人間関係の難しさを感じていることが原因として考えられますが、基本的生活習慣の確立が幼児期の重要な発達課題であることから、家庭でのしつけを十分に行っていく必要があります。



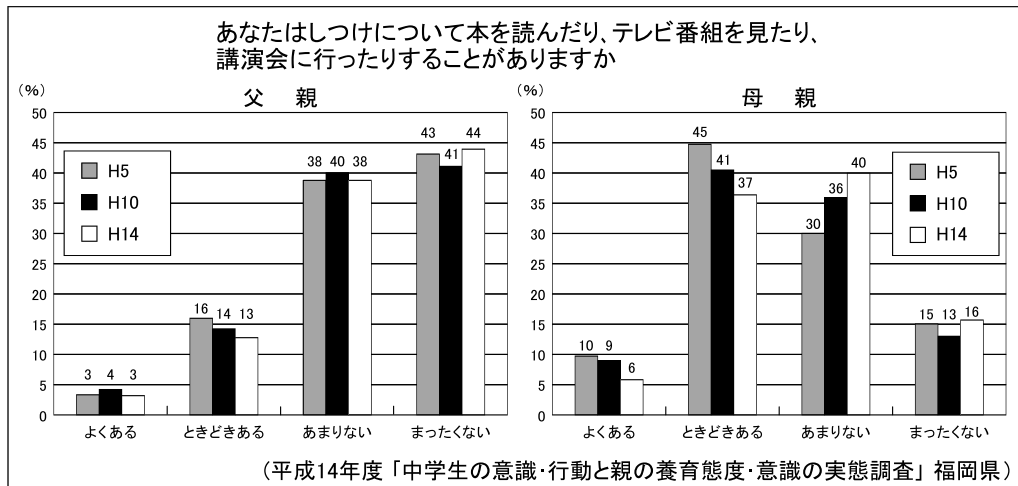
③ 必ず朝食をとる子どもほど、ペーパーテストの得点が高い。

平成15年度の国立教育政策研究所の調査から、「毎日朝食をとる子どもほどペーパーテストの得点が高い傾向にある」ことがわかります。



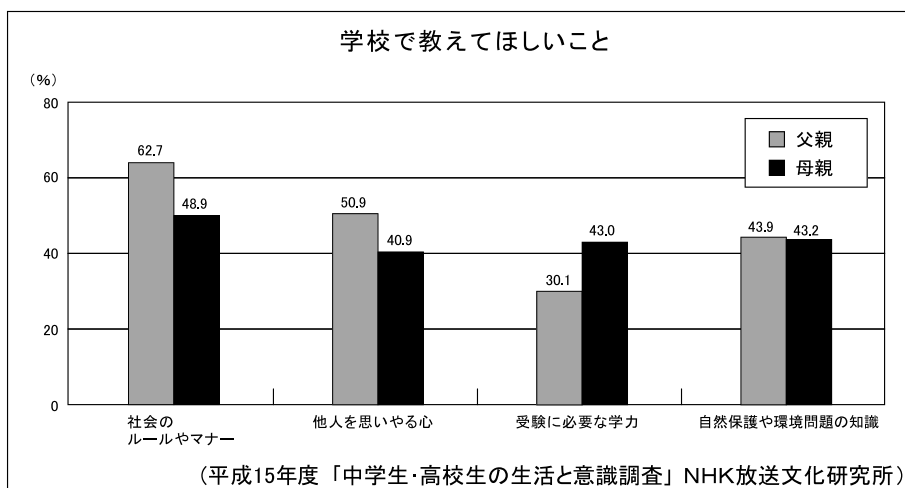
④ 約 8 割の父親がしつけの学習をする機会がない。

平成14年度の福岡県の調査によると、中学生を持つ親がしつけに関する学習をした機会については、母親が4割強、父親が2割弱となっています。父母ともに減少傾向にあり、特に母親は平成5年から12%減っています。



⑤ 社会のルールやマナーの指導を学校に期待している保護者が多い。

平成15年度のNHK放送文化研究所の調査によると、6割の保護者が社会のルールやマナーの指導を学校に期待しています。さらに別の調査では、3割の保護者が基本的な食事やマナーの指導を学校に期待しています。

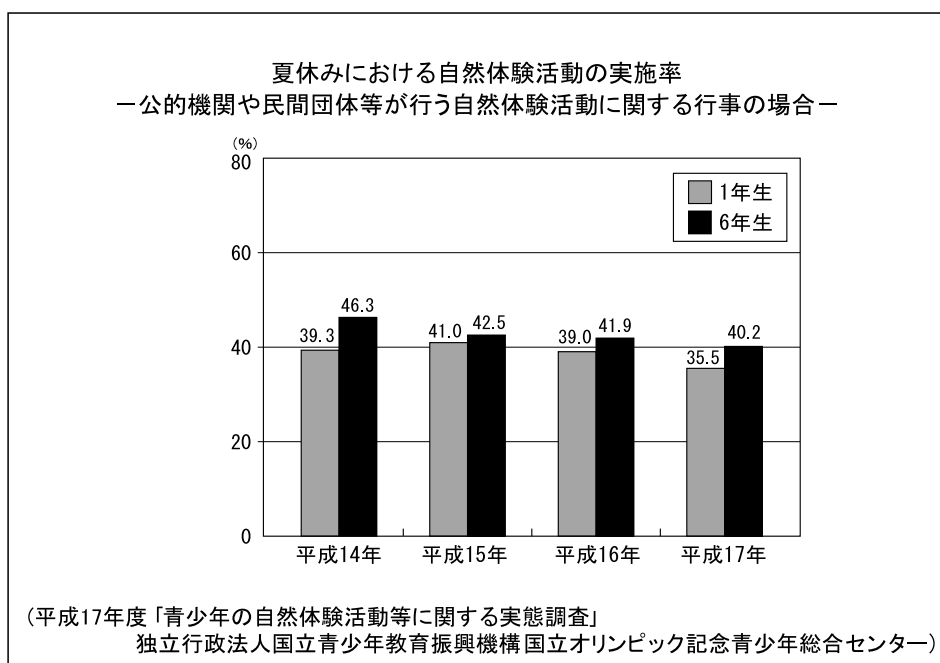


(2) 体験活動の現状

平成17年度の独立行政法人国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センターの調査によると、身近な自然体験も含め、自然の中で活動する青少年が減少しています。例えば、「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」「大きな木に登ったこと」など身近な自然体験についても、平成10年度の調査と比較すると全体的に減少しています。代わって、インターネットや携帯電話等の情報メディアは青少年にも急速に普及しています。青少年の自由時間の過ごし方は一人遊びが多く、多い順から「テレビ」、「CDなどでの音楽鑑賞」「マンガや雑誌」「テレビゲーム」となっています。また、過保護に育ち、困難な体験や不自由な体験をしないままに成長し、耐性が身についていない状況があることも指摘されています。このように、子どもの実態としては体験不足が深刻化しているといえます。

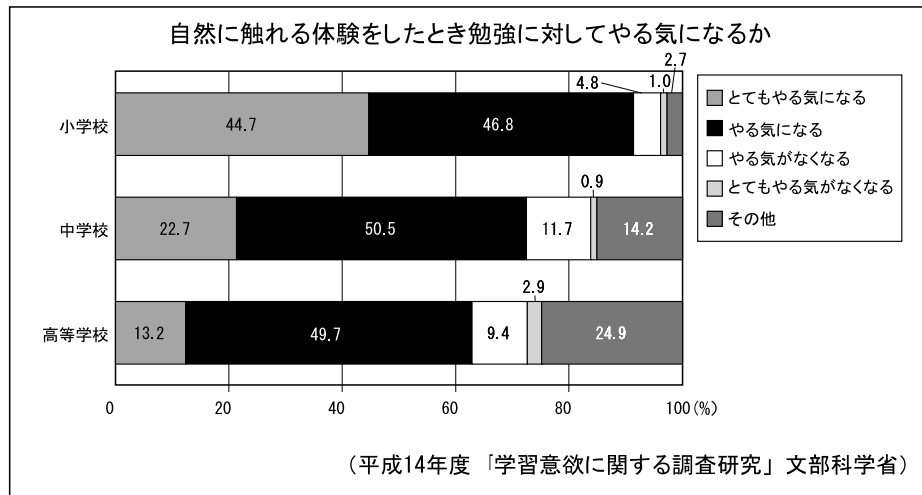
① 夏休みに青少年が自然体験活動に参加する機会が減少している。

平成17年度の国立オリンピック記念青少年総合センターの調査によると、小学1年生と小学6年生の両方とも、平成14年に比べ、夏休みに友達などと一緒に自然体験活動に参加する機会が減少しています。



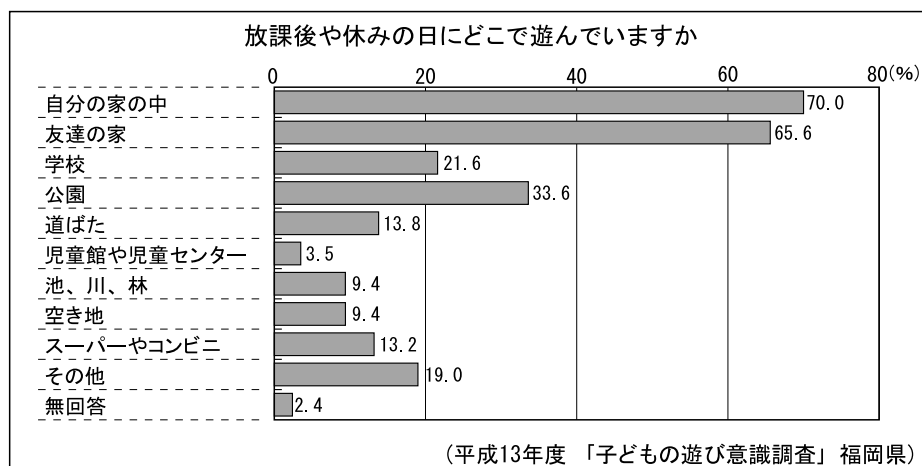
② 自然に触れる体験をしたとき勉強をやる気になる子どもが多い。

平成14年度の文部科学省の調査によると、小学生の約9割強、中学生の約7割強、高校生の6割強が「自然に触れる体験をしたとき、勉強をやる気になる」と答えています。自然体験によって、子どもの感性や社会性がはぐくまれ、自信や意欲の向上につながると考えられます。



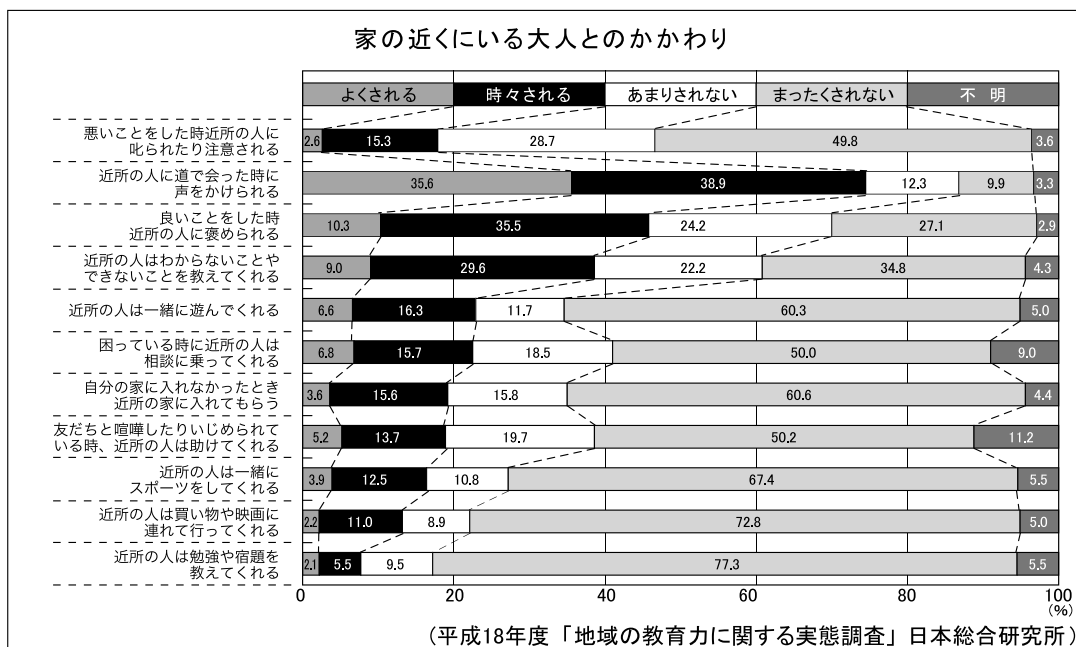
③ 「家」を遊び場としている子どもが多い。

平成14年の福岡県の調査によると、放課後や休みの日に遊ぶ場所として「自分の家」が70%、「友だちの家」が約65%と「家」が主な遊び場となっています。また、中学生の休日の過ごし方として、「家でテレビやゲーム」が14%、「家でゴロゴロ」が12%となっています。



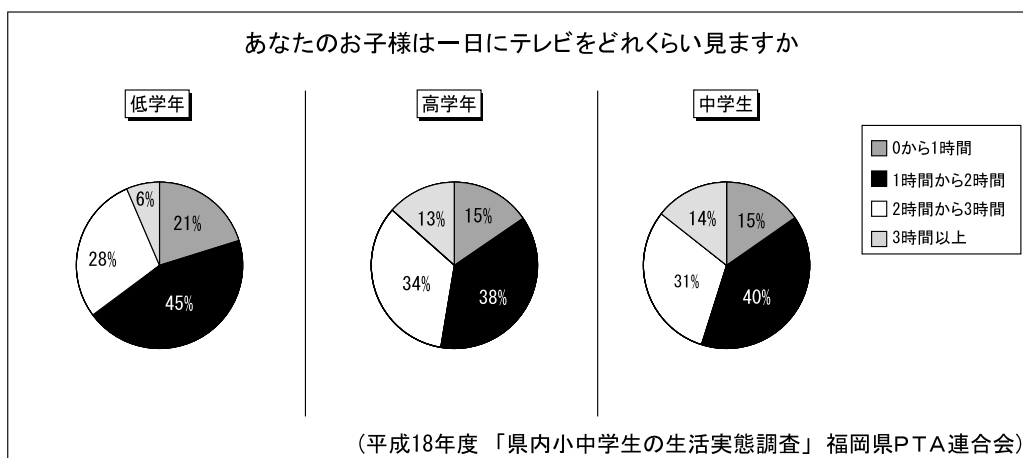
④ 家の近くの大人との関わりが減少している。

平成18年度の日本総合研究所の調査によると、小中学生と家の近くにいる大人との関わりは、「道であった時に声をかけられる」が7割強で一番多く、「悪いことをした時、近所の人に叱られたり注意される」や「一緒に遊んでくれる」など、関わりが深くなると4割程度になっています。



⑤ 約半数の小中学生が一日に2時間以上テレビを見ている

平成18年度の福岡県PTA連合会の調査によると、小学生低学年の34%、高学年の47%、中学生の45%が一日に2時間以上テレビを見ており、そのうち3時間以上見る中学生が14%います。これに加えてテレビゲームやパソコンをしているという実態を考えるとメディア漬けの生活がうかがえます。



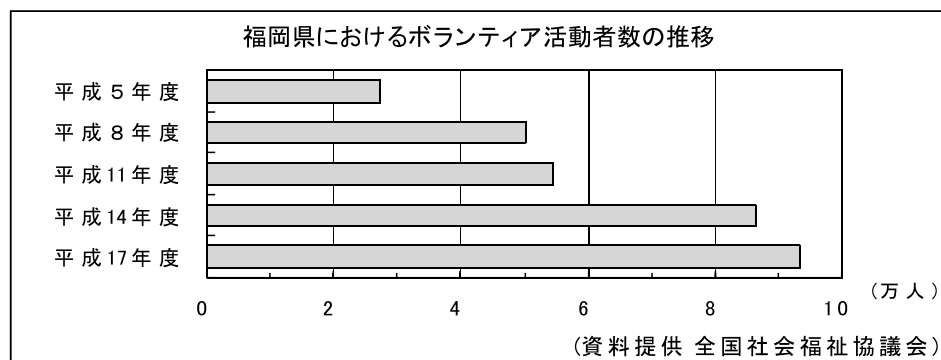
(3) 社会参加の現状

地域において生涯学習が盛んになるにつれて、単に学ぶばかりではなく、学んで得た知識や技術を地域社会の発展や地域の人々のために活用したいと考える人たちが増えてきています。また、近年におけるボランティア志向の高まりは、個人の経済的・物質的な利益を求める生き方ばかりでなく、他者のため、社会・公共のために積極的に自分を役立てたいとする意識が高まってきていることの表れだと言えます。

しかし、公民館などで行われている学級・講座については依然として趣味教養の内容が多く、必ずしも社会参加活動に結びつくものとはなっていない状況があります。

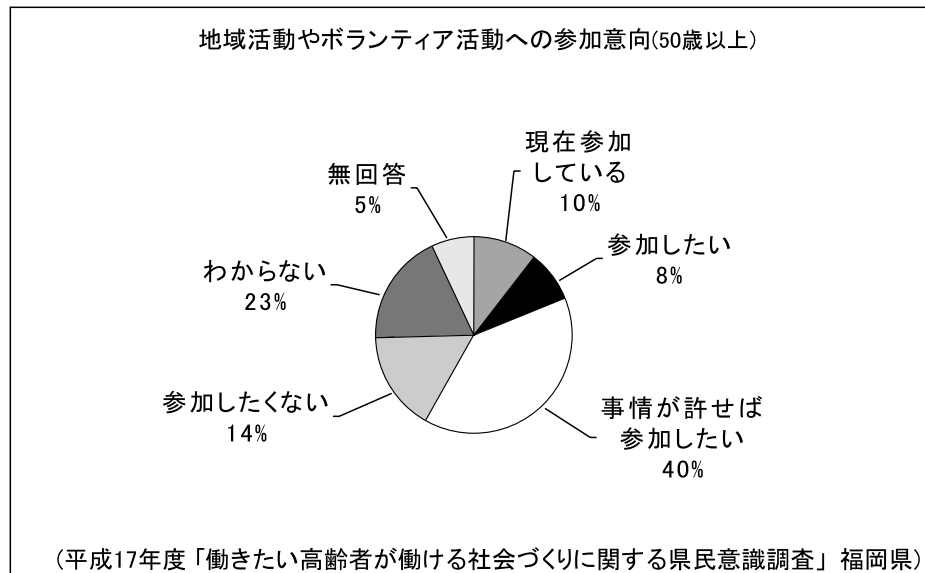
① ボランティア活動者は年々増加している。

全国社会福祉協議会の調査によると、福岡県におけるボランティア活動者数は、年々確実に増加しており、ボランティア志向の高まりを示しています。



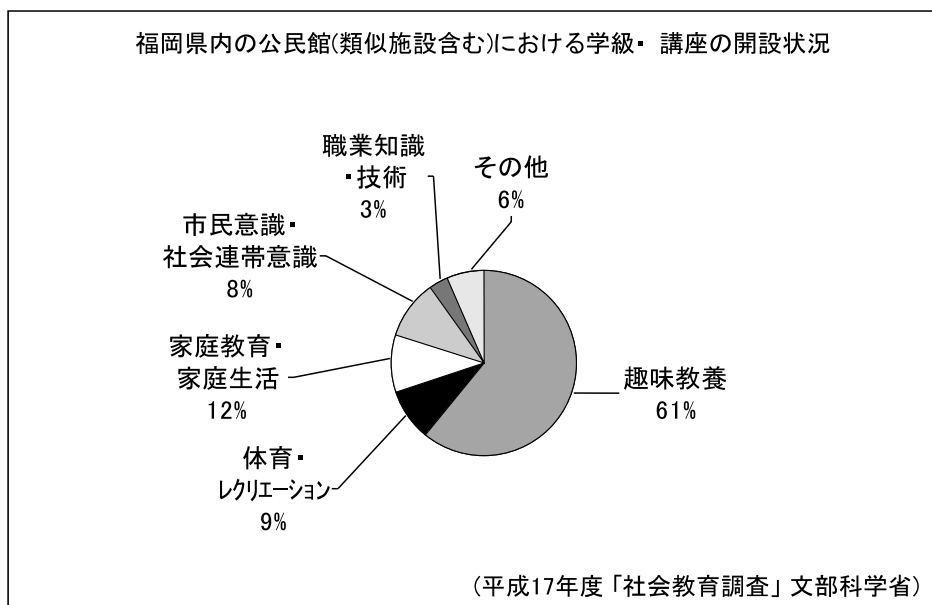
② ボランティア活動への関心は高い。

平成17年度の福岡県の調査によると、福岡県民（50歳以上）の地域活動やNPO、ボランティア活動への参加については、「参加したい（している）」と回答した人が6割近くあり、県民のボランティア活動への関心は高いといえます。しかし、「現在参加している」と回答した人は10%しかなく、ボランティア活動に関心や意欲はありながら、なかなか踏み出せない状況があります。



③ 公民館の学級・講座の多くが趣味教養である。

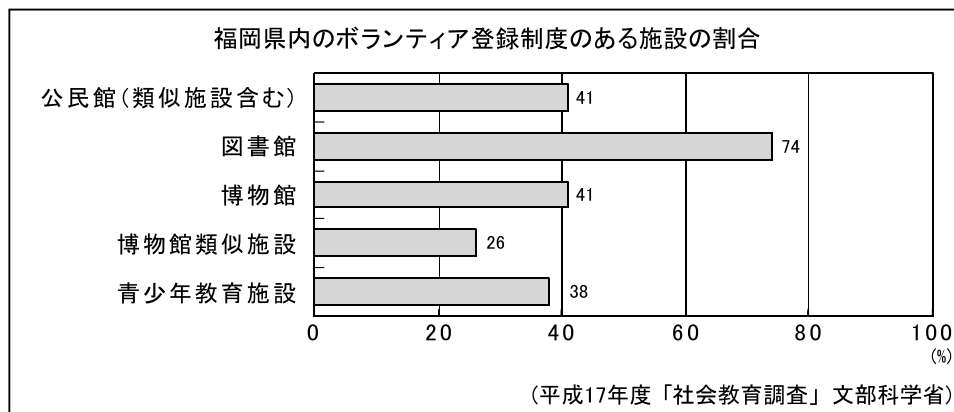
平成17年度の文部科学省の調査によると、福岡県内の公民館や生涯学習センターなどで行われている学級・講座の内容は、「趣味教養」が6割を超え、「体育・レクリエーション」と合わせると7割に達しています。職業知識や市民意識など社会の要請にこたえる講座は少ない状況です。



④ ボランティア登録制度がある社会教育施設が少ない。

同じく平成17年度の文部科学省の調査によると、福岡県内の社会教育施設のうちボランティア登録制度のある施設数は、図書館が70%を超えているものの、全体的に少ない状況です。

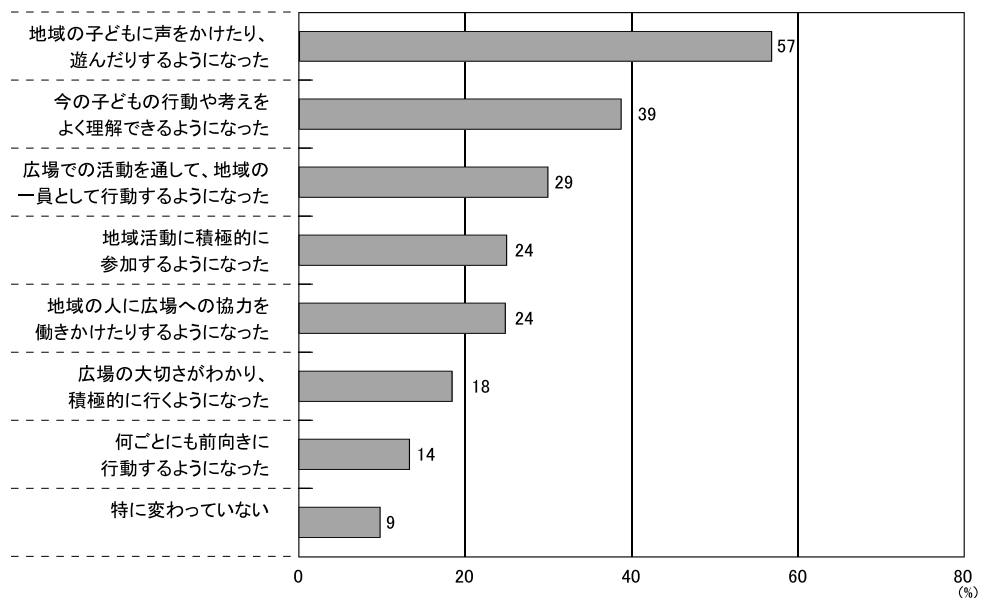
このことは、住民への施設開放や施設ボランティア等の活用、活動の場の提供が十分ではないことを示しています。



⑤ ボランティア活動で大人の意識が変わる。

平成17年度の福岡県の調査によると、「アンビシャス広場」に、ボランティアとして関わっている大人に対して、自分がどのように変わったと思うかを質問したところ、「地域の子どもの声をかけたり、遊んだりするようになった」という回答が最も多くなっています。続いて、「今の子どもの行動や考えをよく理解できるようになった」、「広場での活動を通して、地域の一員として行動するようになった」の順になっています。また、参加頻度が高い人(週に1回以上)ほど、自分の意識の変化を感じている人が多いことも分かっています。このことから、実際にボランティアとして子どもや地域での活動に関わることで、子どもへの理解が深まり、地域への関心やボランティア活動への意欲が一層高まり、生きがいや自己実現につながるものと考えられます。

ボランティア活動による大人の意識変化



(平成17年度「アンビシャス広場づくり事業アンケート結果」福岡県)